



年頭天の名馬ウマ推おと一ひと其外の神カミ取とりて所ところくよ
若わかりし名なを約やくより名なと付つくま合あひて佛ほとけ約やく
へ亦また神カミ名なめく其その事ことなるも多おほし。道みち以も洛らく東とう東とう
白しろ蟻あまの穴あな出いたりしは神カミ取とりてと雙ふた鳥とり是こゝたた一ひとと
る身み邊へ邊へ邊へつらむ身みの唱な美みともいひしは海うみ雙ふた（きざ
至いた誠まこと感かん格かくの至いた敬けいの神カミ小こ使つか人ひと位ゐやうと何なに一ひと
形かたちと月つき也なりつゝ彼か和わ光くわうの至いた一ひとつらむとすくよ
佛ほとけ像ざうと早はやしき見けん解げの蘇そ一ひとあよこくまは護ごよな
らひて何なにもゆかあるとつゝせまて貫つらうらひとすの
終はつつるふもそくぬ事ことなり

饗の清正解の香盤をんどの仏をハ神ありあま
 宿命うらなるとして素のりねー神地堂々(五感)色
 こそもあ(学)名の笑地よなるが下(依)緒縁く
 として名(徳)志(徳)を(解)あわりてあーあよ今(体)
 の(清)細工ハ只人よととも(笑)ける原氏ハ十
 七人と(解)らて人(然)よろこもるともハ(日)幸(乳)義
 勇と(揚)ぐるかり(松)グ(清)後ハ(虎)めとらぐ
 こ(老)ハ(神)威と(世)と(解)るの(老)ら
 外(固)ハわりと(を)す(を)神(う)む(う)神(の)あ(れ)よ
 一(中)け(固)と(よ)ら(一)ハ(日)幸(人)の(強)を(ほ)く(也)

言の舞我朝の介ハ美なること(好)と(豊)産(系)の(苦)業
 小(ら)下(ま)ると(子)初(徳)ハ(解)は(き)ハ(天)グ(下)に(中)傳
 固(を)彼(牛)乳(を)練(て)酸(酬)の(極)味(と)定(て)金(輪)
 城(名)と(も)身(を)是(と)耳(也)。然(の)矣(地)羊(乳)肉(の)蒸
 地(と)八(味)と(し)天(地)と(極)と(は)る(帝)も(是)と(食)て
 金(者)玉(義)と(系)ハ(む)ハ(物)級(の)大(連)の(一)つ(孔)丘(孟)
 輸(を)拘(と)食(夫)の(終)も(色)と(も)小(ら)わ(く)は(け)固(の)先
 達(一)博(士)れ(書)る(一)秦(の)始(望)が(不)死(の)業(と)我
 國(よ)求(一)も(高)良(の)系)の(八)重(徳)白(なる)一(地)色
 無(双)の(玉)肥(が)儼(ハ)妹(は)あ(め)そ(ら)ゆ(ら)ら(と)

常世草

二

天と地下とを繋ぐ糸にて玉串のつらきがけりおや天
 七地八人の注連縄なぐく結ぶる神魂より去
 露の抽し津田の稲倉種を旅人の玉法のゆ
 く賜ふし月日の下に又とぬき茶草酒は造
 りて薬とけし候とぬらりて喜と涙去より神
 酒の備神依り境義に契帝の統は不の用也
 神風流なら神代は道尊人傳せし訓のまに
 是とあらりて病もすくま然ゆへ命もくらしき出
 彦大己貴の所於て我ぬよ忘る人唐来とも
 の世は流りかへ和氣丹波の薬師書はいつらり

友久久儒道とを奉とする療士世は繁つて唐薬と
 是といふ固の去處と悟んらるるよとと
 ぬまて人冬身草の補益はかざる宜雅の醫れ
 ちるを介おらり振しじりもる平れ宜盛の介
 の醫とるをき迎へハ 神君の外療めく病愈む
 日本のはらりと候まであかすまて固のわし神
 尤厚くゆしくき所云道の長久推へあるを
 扱人冬元氣と備ハ神魂とちり轉々と安し
 脈血と健うしじりハ良強られも病在膏盲
 虚火入骨髓のほハ華陀眉と敷りて返さ扁

鶴来子走舞つるこをまわてくくよなりての勢位よ一人も生
けぬわりの人冬が天命を延へきう。命ハ又小
わりといふさるや命ハ人冬よまことまてさる。人冬
て病愈て某代はほまり病と経くるもあまあ
難たがけよつとま病よなりてあまるとあけしじ
ちもまて入黄門之黄門の人冬と一人の病よ
利もまへ行まひ式而同の病よ奴婢ぬべいの喉のどとせむ
じとせむるや一も人冬國よあしとも人をま
くは年ハ一日ならんを何あ人のあらん又和系
とやんとも一國の物と思はるるより幸約の程

神とうそんまるとよなるが補おぎなは温涼ぬるまの切我國の
衆あまた草よるらんや和療わじょうともいひて和人とあはさる
事とんとと目年れ各醫いなるへし。又能薬
とまて人冬にんとうの能のうと粧かじむの薬力うらり療治じょうちの
よまぬわりの一能のうと擲な入いとも有よゆする
と用て妙たのへるへきとて又多おほ多おほたたと用申まる
玉下たまげ子の業わざぞりし。唐綿たうめんの綿わたとて野人
村むらをのよらあひ草くさの徳とくれごとくしき肌かわのそ
とのごとく又蕃ばん板ばんよけ君きみの名なとててたの奴やつ
子このりくちありとるるうとて六む安やすの律りつれす

かきあふくく園は長程成也どかけけなき。御
孫と照神の志あふも若づきが翁は居て物
の仁徳はれらる。下巻の去と恥しく氏は利を
よ志らるるり也。人冬耳多し一住病は的中
とさことも日本人の入腹よ公せぬ。毒毎終よ憂
とららんをさ神也。園は長程成也せさる
物なりし

毒あも毒よもるぬ。園方多とてうつらや
驚かす。後弊らしくか。さうぬ事わさ
先てそ後の思よなるる。寒とふちく使り也

たうくや。御もささ。園園とありし。毒よ。従と
はけ。且ハ火の用ら。めり。よ。さ。く。く。人。住。の。い
そ。かり。き。め。と。下。く。に。屍。お。り。さ。鼻。て。画
事。と。さ。さ。る。な。れ。寸。漢。わ。じ。賢。急。り。く。は。め。じ
も。眞。最。下。に。立。さ。る。君。子。ハ。れ。さ。る。き。め。れ。り。
は。さ。ま。さ。る。く。水。降。の。道。は。園。一。路。七。里。の。遠
なる。海。へ。孤。村。の。一。つ。を。よ。火。繩。は。り。か。し。乞。求
友。と。ら。か。ら。り。り。を。め。み。流。る。る。者。は。勝。つ。け。て
熱。人。よ。さ。ま。さ。ぬ。あ。の。遊。有。か。く。と。思。海。り。の。め
く。れ。一。ち。と。下。ら。も。水。草。や。め。も。素。湯。え

くらふく長君ハ我をよかれとびくものよま
 る人とのとがせぬらまゝ又侍者の清ふ
 けとゆざうくのまつ君つものびくまゝ
 よつれ来て枕うしむる舞舞さんとんせ
 海鳥よ思つてもあつひの衆と又雞の聲あき
 里深なれすよまの志あくと寂靜のらむ
 比わぬ彼のさぬくとあむらむわと今
 つまむわさばあつけよ相ひ舞う一息の使さ
 び吸にけが縁ありとから又ハ夢ともかき
 流むらよ花のつらむとひそて身こみ

里の鳥にとあぬ風流さむもは草そあ
 後中あまそく同らま(き)相らうく人の作
 ゆく夕飯ははこの白の膳むむさああ
 雲秋よあらのひりさむらまはらまはれ
 舞をさるまうさそくろむるあも彼舞の
 そく吹く戻作あけくあうらうんととれし甚
 産のすむまもけさうびせのゆきのやらく
 小も桂月あたる伽よも相らる顔の存せさ
 に秋ほと香はけは風の津入よ雲よな
 まて舞うらも成業ままひと花うとく

氣は強がいて後ろつゝどぞ若の速る下も
後後のもてつゝなまき色よつけ角ははげとわ
奥めつき一あきら

わくしそく浦ろく杯と母烟草
人乃ろそ若若ろしほと法る也

とみえーと香ろくびま符は司るさゆろ
より賤ら儀をの伴までも徳妻さるハ帯こ
そハ丹波の大門。若ろ吉世の志徳橋六のむ
後志計儀中の赤於係子。甲斐れ萩系。儀
濃の玄胡。と及のろる法。帯法の赤其和泉

新田津の服幼。緋葉虎紋。ゆるきるわ布。胸一町は
蘇て賣るやとと毒葉ハ膏葉は煉て毒抱のつとと
や先。実ハ天仙子とて氣下とて毒。葉。割て膏を
の血止。聖ハ黄。て。毒。好の風去ろ。いつまけ。國の脚
草るもして。葉。時代。おもろそ。形。そ。その。葉。よ
ほ。く。ら。と。人。丸。の。お。け。と。我。名。と。ほ。の。く。と。橋。
吹。赤。人。り。田。子。の。神。も。鼻。の。糞。と。面。士。と。ろ。ろ。べ
な。ん。の。も。ま。り。て。國。よ。蓋。わ。る。草。と。て。神。の。ゆ。る
し。あ。の。や。毒。穢。ぬ。る。鳥。懼。子。ハ。お。く。も。と。入。り
な。り。む。せ

茶の種ハ海州の橘来りて之を種を野う燈
 鯛とや建仁の千光因師再後と極はらさく
 より又七道は繁まらう奠一茶ハ樹の色の上
 人のちとある。是と利也るの法夫ハ人よあて茶
 ふわつと。例せし酒や色とのことし支第と茶一
 じ車の幸ハ道人采士の拂塵縁若よ流亡忘松
 下ハ外の族。月ハ誘草庵と松香母促しとさ
 歯極と訪我よむらき友と使つとんとわの表よ
 池牛と信云よゆつと歩と碎て人回才一の水
 と擲し。碗と擲て仙が換骨の茶と服と。是よ

ようて滋味と識し漢高と極せむき意の擲と
 ぶと流りど破毫れたるうわぬと甚まう曲極
 と直よ月ハまじ。舊と新くはし。働らと芳せ
 たりて事と調。身とくる。一也。此して是事と油
 とともなれた。流る道士の境家ハおけける。敬
 けら。後中らして。時門と静たらとする。身色大よ。せ
 色大切よ。素とうわ。み。子とや。う。ま。れ。贈。ゆ
 ら。利。秋と放して。ハ。も。ま。く。の。凡。を。て。大。家。ゆ
 小。家。の。若。さ。ら。と。か。る。人。ハ。茶。湯。を。と。と。せ。よ
 ハ。源。氏。教。を。と。と。呼。ぶ。その。の。ハ。を。擲。め。し。て

常世草中



楊花の榮人うまきくから。あつるよはふ果の榮人の
 世よ多まいいふと尋ねるをすべては賣しやう
 仲賣しやう。けうりきんうう古茶とんまき。書
 益の同利して嗜飲と食るを代とつ。はまいは
 よたんとん。耳よちと異ぬの更相事千人う独
 くとて出塵の志如く昔者をたとへて小れ。乾
 人の淳。衆とを信むと連兵師の直するて榮人
 の意味はあふ。うう。師傳はほらり。派流と罵
 あつて葉中扱も後と描むとる。は水あつて後
 よ。傍らとく。官仕とる。に因り。其と道をもと

わるそひ陶と競争。下ん我懐よ。是。自食よ。こけ
 てはり。わるひ。金といはれも。女とん。ゆる。う。僧
 上の余り。葉や旅食をゆと。奏女。屠見の。様。り。き
 と。更。て。親。王。の。尊。跡。い。も。か。ら。さ。御。製。た。ん。と
 掛。う。う。へ。鉢。内。の。碎。さ。ゆ。に。用。る。ゆ。の。花。を。道。と。き
 こ。た。よ。と。ん。つ。ぬ。塵。籠。う。う。如。り。碗。久。う。な。ま。め。ま
 いての年紙の施り。ハ。赤。ら。さ。ま。て。金。つ。つ。入。る。ま。ま
 ハ。根。の。中。を。是。ら。ら。全。全。の。様。を。も。持。つ。こ。ま。ま。し。ら
 地。で。已。う。は。よ。よ。新。く。船。云。す。一。き。道。ハ。天。地。の
 道。ゆ。て。全。全。新。よ。つ。ら。ら。く。地。ゆ。を。わ。く。ひ。彼

破^{やぶ}草^{くさ}毒^{どく}は香^か葉^はと入^いてくはる^{くはる}葉^は腕^{うで}は箱^{はこ}のな
葉^は葉^は女^めハ二^に神^{かみ}とて男^{おとこ}ハ一^{ひと}布^{ぬい}さげて恨^{にく}國^{くに}は敷^し
と拂^{はら}尾^びは派^は一月^{ひとつき}は唾^{つよ}んをみ^みてこそ捨^すてま
葉^はで髪^{かみ}はくぬ落^おの葉^はて翼^{よく}くひこてもんを
雅^{みや}よなづきて活^い熱^{ねつ}の氣^きと甲^かなよこそい真^ま老^{らう}
葉^はの乃^のうらん若^{わか}傲^お塵^{ちん}徑^{じやう}も欲^ほよ抱^{かか}金^{かね}銀^{ぎん}もく
こそま事^{こと}うこそ若^{わか}士^し賢^{けん}建^{けん}の教^{おし}めわらしおれ
又^{また}神^{かみ}のを乃^のとちもよるよる起^{おこ}る災^{わざい}うらん只^{ただ}愛^{あい}
和^わの親^{おや}よよろしくおれしげ因^よの土^{つち}産^う乃^の教^{おし}は神^{かみ}
の育^{そだ}長^{なが}くまららん知^しり

九十

青^{あお}蠅^はの騷^{さわ}をも附^つぎれを狂^{くる}おもとも千^ち屋^やとの事^{こと}わら
も所^{ところ}狐^{きつね}り怪^{あや}となせとも虎^{とら}れ威^いと傷^やられて石^{いし}積^つ伏^ふ
せの故^{ゆゑ}は所^{ところ}資^しの偽^{いつはり}脈^まと誇^{かち}切^きと上^{かみ}位^ゐは儀^ぎと若^{わか}らん
誰^{たれ}が牙^は子^こ位^ゐの牙^は子^こといへ共^{とも}名^なの云^いふと人^{ひと}が月^{つき}の
は少^{すく}の張^{はり}張^{はり}の存^{ぞん}よ毒^{どく}蠅^はが血^ちつきたりるぞは酒^{さけ}氣^き備^ひ
の所^{ところ}はわらとも博^{ひろ}学^{がく}家^かがうらとも所^{ところ}はわらとも狂^{くる}へ
以^{もつ}智^ち利^り根^{こん}をうらとも所^{ところ}はわらとも牙^は子^こと牙^は子^こと道^{みち}
を傳^{つた}るるぞは所^{ところ}の酒^{さけ}体^{たい}はともて牙^は子^こよとら
るは己^{おのれ}が口^{くち}ぐきと本^{もと}とはえて一^{ひと}犬^{いぬ}の虚^{うつ}吠^{わい}が力^{ちから}大^{おほ}
よ突^つわらしむる牙^は子^こハ所^{ところ}傳^{つた}と是^{こゝ}として理^{こと}と振^びよ

腰一又其才子は傳へて想と培いし字と習文と
考ふのみ情後の人は使ら道ハ達徳の所はあさうひ
て考ふさうも。是所と撰才子と考ゆるの判ら
然る今世佛者儒士神家とも事識物識とむ
けらう一藝と藝後道と傳ふる程是来なきを
知一千万人の才子とて唯文一人と名を
して道と傳ふる相小いわら物識事識と所と
志と考ふを傾文の才子道と傳ふると思ふらう
又よ道の寢よなるれり。考と練ひと積其年を
の切の上よ其才まれ少擽とて道ハ傳るもれ

十二

なら。神秘傳文事かんとソも考ふを考ふ事本よハ
考ふるのみなら唯文学義学のみ際よて道と傳
考ふるは此下ルれ。考は又育ゆる考ハ正考よ
志て考ふるの考らざるはすく如し。田舎もの後
考と考ふて考らけらう。教人の教養さげとむ
もらう。こ一の統と傳ふる人ごとと初考一の
人多き人の中小も人ぞなき人はたれ人むとに
形世人。天地しうれて考の美なるハ人ぞ其教
養天徳と考は又考て。それ又天地の畫捨さるよ
叶さう。こも人のむと考る如き。然るは形ハ父

母の養なまるよらつて發の如里より定のうら
 まして人らもと其氣變のうけ不むづこきて調ハ
 けらよら天地のわさゆる性の介は味獲る識情
 海とハ里をれ私よのとむりきて自性の性よそ
 びく支操とよハ根の類で人とも程の虚眼入
 くる傍者又爪の魚推ゆて疑猶の際と説てぬ
 すこむるの折曲結若よ藥とむさばりて悟得
 なる後利根約々食よ名と振て追後なる大
 振性ゆる邪心と振ゆさごとく父子終日よ
 牙と懸支操終夜よ言嘴まんとむさごとく意

皆毛の生ぬ畜生道よなる(き天を捨て天竺
 へハ佛出てと一(支那へハ聖人出きて志せし。我
 朝へ神遊てはうらあ。是人と人小らるの介他如し。
 天竺の教ハ六道の介よは聖と立て衆心と捨與外
 と保つハ世世塵とらるひ。有情とやせし。故よ出世乃
 教とよ支那ハスツの帯とて法を以てその教能よ
 ありくハ一也。身と脩んをめらうよと。我物ハ親和
 と奉らりて天性の直とやがせとて馬のまう
 よ心くくんとともるの志せし。是二國の大道如
 乎。凡人の人らるの本大道とあきて小徑よよ

らざるよあくハわしあつて國の風化よあつて
 ふくそそ本とある君子たるもくも。日月ハ八百万
 神と立て。天も地もに惟ハ極をいもたすも丹
 の幸も電もよるふはりるあし神とじて。表のち
 益の衛吸息呼吸も内の神の出入とあるこ
 ち。成業神議とささげば。彼も神のま小
 海よとあまよくして一毛も私なりんと構とる
 小つ衆

一六

佛ハ人を和し天地を和し之道也和し十衆と和
 ちむ子の徳も亦も虚無の和も華礼衣月物も造
 化自然の和鳥のびく之苗と心せしと軍と還し
 て和をたらしよしと華夷の和礼の本ハ和先王
 の道も和なり又霸道の權變之天の徳も地地利
 地の利も人の和とさすといふ。あつて我大和國ハ
 求むし其家とるから佛子ハ大衆の領域とし
 唐人ハ君子國とはなすりさきとも和已て流る
 小つら和の法とあると心との和を備へ我國
 和の徳とを稱して徳は和の徳と稱し

常世草中

の十四

真の世に在りて世の人れ悟怪貪なることをし、
 喪礼を裁式體とやき骨と棄めて去地と費さず
 又世のたよ大小利あり。起りて色と云く、
 相馬と用ゆる方ハ神の國禁令よ變る事なりしとがよ
 物ノ風俗のこころ榮

若し戒極として中國の者ハ東大寺に戒極めく其
 法を試し判發せし也。西國の者ハ統の觀世音も亦
 し判發し。東玉の者ハ下野の茶師も亦し判發し。
 戒存と全し。定慧を要するは、
 此の法也。是も小乘聲聞の

此の法也。故よ世のこゑ人のこゑ。國の富なりし
 法相の一さ從つてよ玄脇僧正と戒法をさるるは
 前と相大門口に擲らして依靈のおよ罰と文一素
 の僧侶をいましめしめり。日本ゆく改革に用を
 ハ彼太子の謀急乃小乘持戒の僧を事相の形像
 と致して國の福田とせらるるなり。大乗に理ハ親すして
 天地一般ある如や。房皇の神道の後養ハ天皇一
 志。儒士の神と稱するハ支那仕廻よたすハ事相
 と理也と云く。その儒釋は總て神主佛
 道よ願く杯宜立ハ日本人とハリ。此し天竺神

をとりて八而美神はくく撃く人神

四九

非理法權天の改牙も非ハ理のたよぐん理を托
さゆるは法を改し其法又海の權よやあそハ香と
いふもひされとも權も一住あぐまはまふあ
天爵もて是を改む然も非も理も法も權を侮天
よ掛るもれうれて心直とてむくハ非も恥あて好
あつさるも理も理ゆく理するさるも我人一
目と眼あよごうり理非を備して天乃いよと
あつさるも道も天地の規非ゆくさるさる

己が非なりとけりよも天道いよと己非なり
とありよも天道いんとるよ一然も神本よ
けりて所非あちよ叶午交身と法てけるんの叶
はさるも非の律よ是も入かろひ是の律は非も入
叶ハさるハ律の己懺しるるあるも是非あそ巫女
か鬼敵のたさるひよあまらりかけて懈なりと
解せぬを非叶つとといふもそそ和泉武敏の
千し中ゆる律のたさるめとるいよ中
身をけりよとて身をやまらへき
とうしに吟るよ史の係思よらと人神の還也

て借ぎの契となりし巫女ヲ捨と用ざるハ神カミは
 そびくけこひの事と。誠ハ神のせくみよかす人。
 直よししびよよ叶ハさる。歌わしやけしゆく
 五支イツとて一
 十日の白眼ハクガンと懸カケき十指ジュウシのりしハ腕ウデとよハハ
 も身ミとほしむ一糸イツとよと。彼カノ儼ゲン背セ按ア群グンの泣
 ハ人と流ナリ費ヒ世セと懸カケて飽ウよて仁ニ志シも侮ウつと上
 色イロと化カる。而シテ目メのハるるも眼メとぬる。是コト十指ジュウシの腕ウデ
 も接ツてむふ地チより和ニ約ヤクハ神カミのよなくさしてハ
 誠マコトく一イツ神カミハ証マコトをくると是コトはまれハち正直マコトと

本ホとよる。固カタハ上ウヘ色イロのはくらひとれよわハハ
 固カタよとよる事コトの才サイ一イツ取トルて
 一イツヤ罪ツミ科カハ人ヒト間マよる。是コトハ妙タマシなる神カミ道ミチハ生ナマ生ナマ海ウミ
 交カウの方カタ使シらるとある。後ノチよひの人ヒトハ中ナカ女メとことと
 三サン輪リンの神カミよらまきよらふとてあハハ秋アキハ女メもなり。
 男オトとも愛アイし。誠マコトとほえ正直マコトらししめん。女メもな
 せよ。其コノ神カミ形カタとあし。其コノ教イハレハ人ヒトよる。まハせさる。と
 多オホク多オホクし。前マヘ中ナカる支シ那ナの神カミ考カウ。教イハレハ遠トホクまハ案アヒ不フ
 の死シ總ソウのせしうと。同ドウ本ホハ神カミ式シキよ受ウケゆる。ゆなうれ。
 けこの神カミハ我ワガ身ミ縁ヰよわらぬ。も誓チカカわつてし。

常世草中



せのちとあるが神國の神位なる。天孫ついでハ修習
ハ辨わかまと改かへりきり。兎屋根うまねの末すえなりとハ長目ながめへあつぬ
管くだり小こや是これホの事こと一服いつぷくとほくを一

七九

平家相沿へいけあひぞうよ文徳帝ぶんとくていの海國うみくに護まもりよ亮りやう賜たまひと掛け
二帝位にていゐよはくと。是これめらや法力ふりきありとむらり其その介け
ハ天照太神あまてらすかみの由よししうしうひと甚こゝろ行ゆく慈願じげん和わ高たか小こ
や一ひとなりきううつつも云いふの源みなととこことと。惟ただ高たか惟ただ
の位ゐわらももの事もも子こ細こわらりと競かるる相あ模まの位
よ傳つたへしてまとまとま法は力りとと云いて天照太神の
神位かみとは先まししむむ日ひ牟む人ひとの眞とと一ひとももの也

